

対人コミュニケーションにおける文化差と普遍性
——表情と感情の心理学的研究の視点から——

中 村 真

Cross-Cultural Differences and Universals
in the Interpersonal Communication:
A Review of Psychological Studies on
Facial Expressions and Emotion

Makoto NAKAMURA

The topics on the cross-cultural differences and universals in the interpersonal communication of emotion via facial expressions are argued from a psychological point of view. Facial expressions of emotion take the fundamental roles in the basic interpersonal communication as the media which works to formalize the infants' attachment to care-givers and as the signals that indicate positive and/or negative evaluations in social and direct learning processes. These roles are realized by the universal features of the facial expressions of emotion, that is, the universal expressions and recognitions of emotion, the very early acquisition of the expressions, the function as the source of subjective feelings via facial feedback or facial efferent, and the imitation and contagion processes which transmit the expressions. Although facial expressions of emotion are universal, the interpretations of the expressions can vary among situations and cultures. The differences of the interpretations are explained by assuming cultural display rules. As an example, a cross-cultural analysis of the expressions of emotion is summarized and discussed in terms of the differences in display rules between Japanese and Americans. Finally, a social-biofeedback model is presented which explains the process of acquisition of the rules which control the expressions. It is emphasized that the examinations of the underlying universal mechanisms are essential to deepen the understanding of the interpersonal communication of

emotion and its differences among cultures.

キーワード：対人コミュニケーション、感情、表情、文化差、普遍性

1. はじめに

1996年に、“emotional intelligence”についての著作(Goleman, 1995)が邦訳され、ベストセラーになったことは記憶に新しい(「EQ ころの知能指数」土屋京子訳 講談社)。Golemanの主張には過度の単純化などの問題もあるが、社会生活における感情と対人コミュニケーションの重要性に光を当てたことは評価されるべきである。また、そこには本稿のテーマに深く関係する引用があった。

然るべきことがらについて、然るべきひとびとに対して、さらにまた然るべき仕方において、然るべきときに、然るべき間だけ怒る人は賞賛される。(アリストテレス「ニコマコス倫理学」高田三郎訳 岩波書店より：Goleman 邦訳 p. 4)¹⁾

これは怒りに関する中庸として穏和を取り上げるとともに、怒りに関する諸「状態」について論じた章の一文である。言われてみれば当たり前のことではあるが、アリストテレスの時代から、適切な感情を如何に適切に表現するかが、対人コミュニケーションや社会生活における重要な問題であると強く認識されていたことが分かる。

この文を感情に一般化して解釈すると、結論として人間は感情的であり、感情を表出することこそ意味があることを認識している点と、適切な表出はいくつかの要因の組み合わせと各要因がある値を取ることによって規定されることを端的にまとめている点で重要である。以下の各節では、対人コミュニケーションにおいて感情とその表出がどのような意味をもち、どのような役割を果たしているか、さらに、文化差に代表される集団間のコミュニケーションの多様性が、様々なルール(文脈要因の組み合わせ)としてどのように記述されるか、またそのようなルールがどのようなプロセスで獲得されるかについて、主として心理学の知見に基づいてまとめてみたい。

ここでの基本的立場は、感情のコミュニケーションにおける普遍性ととも文化差を生み出すプロセスの普遍性にも注目する事で、対人コミュニケーションにおける様々な文化差をより深く理解できるというものであり、筆者が別の機会に論じた点を統合し、発展させたいと考えている(中村, 1995, 1998)。なお本稿においては、対人コミュニケーションとして、基本的に対面の一対一のコミュニケーションを想定している。

2. 感情と対人コミュニケーション

ここではまず、先に示したアリストテレスの第一の論点、人間は感情的であり、そのことに意義があるということについて進化論的な立場から論じてみたい。ついで、感情には様々な側面があり、その中で特に対人コミュニケーションにどのように関与しているかをまとめてみる。

2.1 感情の意義

感情は理性的行動を乱す阻害要因とみなされることがあるが、その原因の一つは、感情が時に理性を超えて、自動的、無自覚的に反応を引き起こすからである。Frank (1988) は進化論的経済学の立場から、感情によって引き起こされた一見不合理に見える行動が、実は一見合理的に見える行動よりも合理的な役割を果たしている例を挙げている²⁾。すなわち、1万円の盗難被害のために10万円の訴訟費用がかかる場合、理性的な「合理主義者」Aは訴訟を取りやめる。しかし、もしAがこのように理性によってのみ振る舞うことが分かれば、Aの所有する10万円未満のものは盗み放題である。一方、盗まれたことに怒り、かっとなって費用がいくらかかろうと訴訟を起こす「感情主義者」Bは、そのような「不合理な」感情的行動のために、その後被害を受ける可能性は低くなる。この例は、感情が作用することによって、意志決定や行動が目先の利益を求めるものではなく長期的に有利なものになることを示している。

戸田(1992)は進化論的な考察から、感情は人間が文明化する以前の野生環境において適切な行動の選択をするためのシステムとして発達したと論じている。つまり、感情は、われわれの祖先が、外敵に対処したり同じ種の仲間と円滑な関係を築き維持できるように、迅速で適切な行動がとれる

ように発達した評価と適応のシステムである。

たとえば腹が立って相手を殴り付けることは、先に述べた例のように自分に対してやってはいけないことを相手に知らせたり相互の距離(序列関係などを含む)を保つはたらきがあるし、深い悲しみに泣き崩れることは周囲に援助行動を促す作用がある。このようなはたらきは、かつての自然環境においてはうまく達成されていたであろうし、現在の私たちの生活においても不可欠である。

2.2 感情の3つの様相とコミュニケーション

一般に、感情には次の3つの側面がある(e.g., Buck, 1988)。一つは生理的反応で、特定の感情に対応した筋活動や血圧、心拍の変化などである。すべての感情が生理的に異なる反応パターンを有しているかはまだ分かっていないが、例えば、幸福や喜びに伴って心拍と血圧は減少したり、唾液や涙の分泌が生じやすくなるなどの結果が得られている(e.g., Levenson, Ekman, & Friesen, 1990)。第2に、表情、音声表出、身体動作などの表出行動があげられる。中でも特徴的なのは表情で、音声や身体動作に比べて非常にはっきりした感情表出のメディアになっており、いくつかの感情に対応する特定の顔面筋運動のパターンが見出されている(e.g., Ekman & Friesen, 1975)。

第3の側面として、感情の主観的な自覚経験がある。このような経験があつて初めて自らの感情状態を知ることができるのだが、同時に主観的経験は感情経験の言語化と言語を媒体としたコミュニケーションを可能にするなど、高度な情報処理とのインタフェースになっている。さらに自覚的な経験によってその感情が罰や強化子としての意味をもつことにつながるなど(3.2節を参照)、様々な行動を動機づける役割を果たす。

このような3つの側面を、潜在変数としての感情を反映した異なる表出パターンと考えると、主観的経験は自分自身にだけアクセス可能な意識という内的世界への感情表出であり、表情に代表される表出行動は自己ではなく他者にとってアクセスが容易な外界への表出である。また、生理的反応はこれらの感情表出を可能にするインプリメンテーション(implementation)レベルでの表出といえよう。感情の表出をこのように理解すれば、

表情の最も重要な役割は他者に認識され、本来内的な経験である感情が共有されるのを可能にし、対人コミュニケーションの基盤を支えることである。

3. 感情表出の役割

表情は感情の伝達や共有を通して、愛着という個人と個人の最も基本的な絆の形成において、また社会的ルールの学習において報酬と罰の信号として重要な役割を果たしている。この節では、このような個と個、個と社会をつなぐメディアとしての表情の役割について論じる。

3.1 愛着

人間には愛着 (attachment) と呼ばれる、他者と結びつこうとする傾向がある (Bowlby, 1979)。乳児にはもともとしがみついたり泣いたりして養育者と接近しようとする行動が備わっているが、愛着は発達の初期に養育者との肌の触れあいを通じた密接な関係を築くことによって形成される。このとき、肌の接触と共に微笑みが重要な役割を果たす (小嶋・大日向, 1990)。

新生児においても観察される微笑みの表情は養育者を動機づける報酬として非常に重要である。この時、子供が実際に快の感情状態にあるか否かはさして重要ではない。微笑みを見た養育者は子供に対して微笑み返し、積極的に働きかける。働きかけられた子供は今度は実際に快の感情反応として微笑み、笑いかける。このように、相互の愛着の関係は笑顔に媒介されて形成される。なお、愛着は必ずしも幼児や子供に固有の性質ではなく、人間の発達のあらゆる段階で個と個を結びつけるはたらきをしている。

3.2 直接学習と社会的学習

Bandura (1971) によって提唱された社会的学習理論によれば、学習は自分自身が直接試行錯誤を繰り返さなくても (直接学習をしなくても)、他者の行動とそれに対する報酬、または罰を観察することによって成立する (代理的強化と代理的罰)。実際に人間はこれまでに経験したことの無い (従って、強化されたことも無い) 新しい反応や行動を産出することがで

きる。

ところで、一般に人間の場合、何が報酬となり何が罰となるかは比較的曖昧である。食物をもらうことが報酬に値すると評価する観察者もいればそうでないものもある。場合によっては、与えられたものが報酬か罰かさえ明白でないこともある(あまりにもわずかな報酬は罰として解釈されることもあり得る)。これに対して、表情は強化の正負を評価する非常に明確な手がかりとなる。モデルの行動に対して笑顔が示されれば正の強化子に、怒りや嫌悪といった否定的な表情が示されれば負の強化子になる。もちろん行動へのフィードバックに対するモデル自身の表情は、絶対的な手がかりになる。

もちろん、表情は直接学習における正負の強化子としても有効で、自分の行動に対して笑顔がフィードバックされればその行動は強化され、しかめ面が示されれば抑制される。このようなプロセスは、曖昧な状況にどのように対処すべきかを母親の表情などを頼りに決定する社会的準拠(social referencing)の背景にもなっており、様々なルールの学習を支える生得的行動の一種と考えてよいだろう。社会的準拠行動は、発達のごく初期、生後10カ月までには表れる(Bandura, 1986; Bretherton, 1984)。

4. 感情表出の特徴

前節で述べたように、表情は対人コミュニケーションの基礎を支える役割を果たしている。そのような役割は表情のもついくつかの特徴によって支えられているが、ここではそのいくつかを簡単にまとめてみる。

4.1 基本的感情表出の普遍性

表情の科学的研究は C. Darwin にさかのぼることができる。Darwin (1872) は、世界各地の様々な人種の表情を研究した結果を紹介し、感情の表出、すなわち表情はヒトという種に生まれながらに備わっており、進化の過程において獲得された行動様式であると論じた。

生得性を科学的に検証することは困難であるが、その傍証として行動様式の文化普遍性をあげることができる。Ekman らは、幸福、驚き、恐れ、嫌悪、怒り、悲しみという6種類の表情が汎文化的と考えている(cf.,

Ekman & Friesen, 1975: 最近の研究で、軽蔑の普遍性も示されている (Ekman et al., 1987)。Izard (1971) も、8つの異なる国の被験者を対象に同様の研究を行ったが、やはりかなりの高率で判断が一致することが示されている。これらの表情の普遍性をめぐっては近年いくつかの論争があるが、批判的立場からも普遍的側面が全く認められないという主張はなされていない (cf., Ekman, 1994; Izard, 1994; Russell, 1994)。

4.2 表情の発達

Steiner (1979) によると、まだ食物等を摂取していない生後数時間の新生児にも、味覚や嗅覚に対応した表情がある。つまり、新生児は甘味刺激を与えられると微笑み、苦味刺激に対しては顔をゆがめ、酸味に対しては口をすぼめるような表情を見せる。この研究は、先天的に大脳新皮質をもたない無脳症児を対象にしても行われ、同様の結果が得られている。また、先天的に盲目で聾啞の6名の子供を対象に実施された7年間にわたる行動観察によると (Eibl-Eibesfeldt, 1973)、ビデオ撮影された笑い、怒り、拒絶などの表出行動は健常な子供と細部にわたるまで対応しており、これらの行動(表情だけではなく動作や発声を含む)が、視聴覚的な学習経験無しで身につけていることが示されている。

表情の模倣について健常児を対象にした研究によると (Field, Woodson, Greenberg, & Cohen, 1982)、生後間もない時点で表情を模倣することができる新生児もいる。個人差はあるが、生後12日~21日の新生児には、口を大きくあけたり、舌を出したりする顔面動作を模倣する傾向があることが分かっている (Melzoff & Moore, 1977)。

このような研究が示唆することは、基本的感情を表す微笑みや泣き顔といった表情には、人間が生まれながらに備えている基盤が存在するということである。障害のある子供を対象にした研究結果とも合わせて考えると、人間は出生時からいくつかの表情を非意図的に表し、また他者の表情を模倣する能力をもっていると考えられる。

4.3 感情経験の源としての表情

感情がどのように喚起されるかについては、心理学の歴史の始まりから研究されてきた (cf., James, 1890/1984)。通常、表情は感情経験の結果と

して生じると考えられているが、逆に感情経験の源として顔面筋活動のフィードバックを重視し、感情経験には顔面の動きなどの情報が必要不可欠であるとする表情フィードバック仮説が提唱された (Tomkins, 1962, 1963, 1983)。この説によると、例えば幸福や喜びという感情は、それに対応した顔面筋の活動(微笑み、笑いの表情)が生じ、その時の神経インパルスの密度パターンについての情報がフィードバックされることによって経験される。最近のレビューによると (e.g., Manstead, 1988)、フィードバックが感情経験の必要十分条件という仮説は支持されていないものの、表情があれば感情も経験するという相関関係は示されている (e.g., Strack, Martin, & Stepper, 1988; Larsen, Kasimatis, & Frey, 1992)。

また、詳述する余裕はないが、顔面筋活動によって生じる血液温度の変化が情動経験の背景にあるという顔面血流理論が、Zajonc, Murphy, McIntosh (1993) によって提唱されている。これらの研究から、顔面筋の活動や脳へ供給される血液温度は、少なくとも感情経験を左右する重要な要因の一つといえよう。

4.4 表情の伝染

Dimberg (1982) は、表情を見ているだけでその表情に対応する顔面筋が活動することを筋電図反応パターンの測定によって見いだした。観察者は笑いや怒りの表情を提示されると、自分では意識することなく、表出者が笑っていれば大頬骨筋を、怒っていれば皺鼻筋を収縮させていた。Vaughan & Lanzetta (1980) も同様の結果を得ているが、これらの結果は、笑いとう怒りの表情がそれぞれ快、不快の刺激となっていた可能性と、観察者が自発的に表情を模倣した可能性とを示している。また、視覚的にも観察可能な表情を調べた研究では、様々な表情が模倣されると報告されている (千葉, 1990; Hsee, Hatfield, Carlson, & Chemtob, 1990; Wallbott, 1991)。さらに、Provine (1992) は笑いの伝染について研究を行い、欠伸と同じように笑いが伝染することはヒトという種に備わった行動パターンの一つだと論じている。

これらの研究によると、表情は表情によって表された感情を喚起する刺激となるか、もしくは観察者の自発的な模倣行動によって伝染していく。

対人コミュニケーションにおける文化差と普遍性

先に述べたように表情が感情経験の源となることを考慮すれば、他者の表情に接することによって、われわれはその人の感情を判断することができると同時に、表情の伝染、模倣を通して相手と同じ感情を経験し、その体験を共有していると考えられる。

この節では、基本的な感情を示す表情が生まれながらに備わり、文化に依存しない行動パターンであること、感情の結果としてだけでなく感情を喚起する効果があること、さらに伝染や模倣といったプロセスで他者へ伝わり感情経験の共有を促す働きを持っていることを論じた。前節で述べた、個と個の絆を形成し、個と社会を結びつけるような機能は、これらの表情の特徴によって支えられていると考えられる。

5. 感情表出のルールと対人コミュニケーションの文化差

これまで、感情伝達と共有のメディアという視点から表情を取り上げ、その特徴や機能について論じてきた。しかし、日常的な対人コミュニケーションの場面において表情が唯一の情報源であることはきわめて希である。表情は様々な文脈の中に埋め込まれた情報源の一つであり、それぞれの文脈の中ではじめて意味をもつ。この節では、冒頭で紹介した引用の第2の論点、つまり、感情の表出には適切性があり、この適切性はいくつかの要因の組み合わせと各要因がある値を取ることによって規定されることについて考えたい。

5.1 神経文化モデル

文脈を構成する様々な要因の中で何がコミュニケーションを規定するかやその組み合わせ、それぞれの要因が取りうる値については多くのバリエーションが考えられ、性別や世代差なども含めた広義の文化的背景によって、これらのバリエーションが記述されることがしばしばある。

感情と表情との関係は普遍的であっても、どのような場面でどのような表情をするべきかは個々の集団によって異なる。この考え方は神経文化モデルと呼ばれており (Ekman & Friesen, 1969)、表情の文化差の問題を説明するために、どのような場面でどのように感情を表すべきかについての文化的取り決めがあると仮定されている。このような取り決めは表示規則

(display rules) と呼ばれ、文化的因習としてある場面でどのような表出行動をするべきかを規定している。

先に述べたように、ルールにおける差異は、ルールで取り上げられる要因やその関係、各要因がとりうる値の適切性の評価における差に由来するものと考えられるが、以下では、これらの問題を検討した具体例として、感情表出の程度についての研究を検討する。

5.2 嫌悪と悲しみの日米差

感情が行動一般としてどの程度表出されるかについて、筆者はこれまでに、日米の学生を対象に4回の質問紙調査を行った(中村, 1994)。ここではその結果の一部を、特に嫌悪と悲しみの表出程度の差異に注目して考察する。

日米の学生を対象に(日本は3サンプルで、各55, 50, 20名、米国は1サンプル72名)、幸福、悲しみ、怒りなどの基本的な感情を経験している時、その感情をどの程度表出するかを調査した。被調査者は、「全く表出しない—非常に表出する」の7段階で回答した。日本の3回の調査に共通する結果としては、幸福と驚きが最も表出の程度が高く、嫌悪は最も低かった。さらに、幸福と驚き、悲しみ、嫌悪の順に表出の程度が低くなることがすべてのサンプルに一貫していた。

これらの結果をアメリカ東部の州立大学で行った調査結果と比べると(米国のサンプルが1つしかないので結果の一般化には慎重にならなければならないが)、幸福と驚きが最も表出の程度が高いという点で共通しているが、悲しみと嫌悪については日本とは全く逆のパターンになっている。つまり、アメリカ人大学生では、嫌悪は悲しみに比べて表出の程度が高く、悲しみはすべての感情の中で最も表出の程度が低い。

これらの結果は、「感情の種類」という要因が「どの程度」感情を表出するかを左右していることを示しているが、この結果が日米学生の適切な表出の程度を反映していると解釈すれば、これは適切な感情表出に関する一組の規則を例示したものと言えよう。

5.3 文化差の背景

それでは、なぜ、日米学生にはこのような規則があるのだろうか。言い換

えれば、なぜ日本人は悲しみに比べて嫌悪を表出しにくく、アメリカ人はその逆になるのだろうか。さらには、いったいどのような要因が、日本では悲しみの表出よりも嫌悪の表出を抑えるように作用し、米国ではその逆に作用するのだろうか。ここではこのような文化差の背景について考察してみる。

嫌悪については、その概念に日米差を指摘する研究がある。Rozin ら (Rozin, Haidt, & McCauley, 1993; Haidt, Rozin, McCauley, & Imada, 1993) によると、嫌悪 (disgust) は、概念的に異なる 8 つのグループに分けることができ、これらはさらに、「核となる嫌悪」、「動物を思い起こさせる嫌悪」、「社会道徳的嫌悪」の 3 つに分類される。「核となる嫌悪」には、食物、動物、身体の産物が含まれ、汚染の可能性のあるものへの接触を警戒させるはたらきがある。「動物を思い起こさせる嫌悪」には、性、外皮の侵害、死・死体、衛生が含まれるが、これはわれわれが動物であるということを思い起こさせる物事に関係しており、自分を単なる動物とは認めたくないという価値観を前提にしている。「社会道徳的嫌悪」はより複雑で、社会的文脈の中での人間としての行為に関係している。

Imada, Yamada, & Haidt (1993) は、日米の大学生を対象に、自分が経験した嫌悪の出来事を記述するように求めた。これを先述したグループに分類したところ、「社会道徳的嫌悪」を除き、日米間で良く類似していることが分かった。「社会道徳的嫌悪」として報告されたのは、アメリカでは人種差別や無意味な殺人などある種の社会的な問題を指摘することが多いのに対して、日本では、個人や一対一の関係で生じる不満、憤り、失敗などをあげることが多かった。

日米間で嫌悪という感情概念にこのような差異があるとすると、それが表出の差になって表れる可能性はある。つまり、日本では嫌悪を個人対個人というどちらかといえば狭い対人関係で経験するとすれば、そのような場面でその否定的感情をそのまま示すことは相手との関係に決定的影響を及ぼす可能性が非常に高い。必然的に表出には抑制がかかる傾向が生まれる。一方米国では、嫌悪はどちらかといえば社会的な不正などに対する感情であり、それを表明することが即座に個人の対人関係を左右する可能性

は低く、日本の場合と比べると、その表出に対する圧力は弱いであろう。

悲しみについてはこのような直接的な比較研究が見当たらないので、簡単に理論的な考察を試みる。悲しみという感情は、うれし泣きのような場合を除き基本的には自己にとって重要なものの喪失に対する反応であり、涙を流したり泣き声をあげることによって他者に保護の行動を促すという適応的機能があると考えられる。このように悲しみの感情を表出することが他者の援助を求めることと解釈されるなら、これは自分一人ではやっていけないという意思表示にもなる。

このような意思表示に対して、一人でやれなくてどうするという否定的な対応もありうるし、自分一人でやれないのは当たり前だからお互い助け合ってやろうという対応もありうる。このような対応方略の差異を生み出す要因の例としては、繰り返し主張されることではあるが、集団における生産システムの違い(変化)がある。いわゆる狩猟に依存した生活を営む集団と、農耕に依存した集団とでは集団行動や協調性への圧力に差があるということである。もちろん今の日米にこのような生産システムの差があるとは思われないが、様々な社会的環境要因の違い(例えば、国家を構成する民族の多様性の差、歴史的に共有された価値観を持っていることと持っていないことなど)が、結果的に異なる環境圧力を生み出していると考えられる。

当該集団を取り巻く環境における様々な要因を想定することで、適切な感情表出(この場合は悲しみ)の程度に関する差が生じることを説明ができるし、さらに、様々な要因を個人—集団主義のような文化的次元に抽象し、集団間の差を文化差として記述することもできる。先に述べた悲しみの表出に対する対応方略の差は、日米の文化差に関して頻繁に指摘される個人主義(individualism)と集団主義(collectivism)の違いに反映されていると解釈することもできる。近年あらためて単純な二分法の弊害が指摘されてはいるが(e.g., 柏木、北山、東, 1997)、これら2つを両極とする次元としてその特徴をまとめてみると、個人主義的傾向が強いアメリカでは、対人関係についての価値前提が個人の独立性を重視するために、一人一人が同格の立場で相対し、人間関係は対称的で水平的であるが、日本で

は、相互依存性が重視され人間関係は相補的で垂直的なものとなる(岡部, 1987)。

このような文化的次元に基づいた日米差は、表出行動の差を説明する要因とみなされることがあるが、むしろ表出行動を含む様々な行動様式の差を抽象するものと捉えるべきであろう。次節では、われわれが文化的次元そのものを身につけるのではなく、表出のルールをはじめとして、まず単純な行動制御のルールを習得することを考察し、そのルール獲得のプロセスについて考えてみたい。

6. ルール獲得のモデル

第3節でも述べたが、表情は直接的学習・社会的学習のいずれにおいても重要な役割を果たしている。ここでは、表情を媒体にした社会的なフィードバックがどのように学習を支援するかについて、モデルを提示して考える。

6.1 社会的バイオフィードバック

感情に関わる主観的経験は基本的に自己完結的で、自分自身の感情状態を知るのは自分だけである。このような感情状態を自己認知し、ラベル付けし、制御し、他者に共感することを可能にするのは、環境からのフィードバックに他ならない。さらにこのフィードバックを構成するのは、表情をはじめとした表出行動と他者の存在である。感情反応として表出される行動は表出者ではなく他者にのみ接近可能であり、それに対する他者の反応が得られたときに初めて自分の感情に関する情報を利用できることになる。Buck (1988) はこのようなプロセスを、社会的バイオフィードバックと呼んでいるが、発達過程で子どもが自分の感情を認識し、言語化したり制御したりするために不可欠のものである。

例えば、積み木をうまく積み上げられなくて腹を立ててしまった幼児は、文字どおり感情にとらわれた状態で手にした積み木を投げつけてしまうかもしれない。このような時、養育者らが「うまくいなくて腹が立ったのね」といってなだめたり、「そんな顔したら駄目」と叱ったりすることで、子供は自分の内的状態(感情)に名前があることを知り、自分が感情

を表出していること、さらにはそれを調節する必要があることを学ぶのである。

6.2 ルール獲得のモデル

このようなフィードバックによる学習のプロセスを説明するモデルを考えてみる。図1に感情の喚起、表出と、表出に対する外界からのフィードバックのプロセスを示した。感情を喚起する刺激は、視覚中枢を経たのち、皮質連合野を経て感情の中核である辺縁系へ達する場合と、直接辺縁系へと達する場合とがある。また、感情反応は、辺縁系から連合野を経て運動中枢のはたらきによって表出される場合と、連合野を経ることなく表出される場合とがある (cf., 堀, 1991)。連合野は様々な情報を統合するはたらきをしており、また特に前頭前野は行動のモニターや調整を行う(前頭前野は皮質連合野の一部であり、両者を分けて図示することは誤解を招く可能性もあるが、ここではその機能を強調するためにあえて分けて示している)。

このモデルは、感情反応が皮質の処理を経ることなく生じて表出される可能性があることを示しており、かっとなって手を挙げてしまうというような感情にとらわれた状態の背景を説明している。同時に、感情反応が連合野の特に前頭前野の処理を経ることで、より適切な仕方で表出されるこ

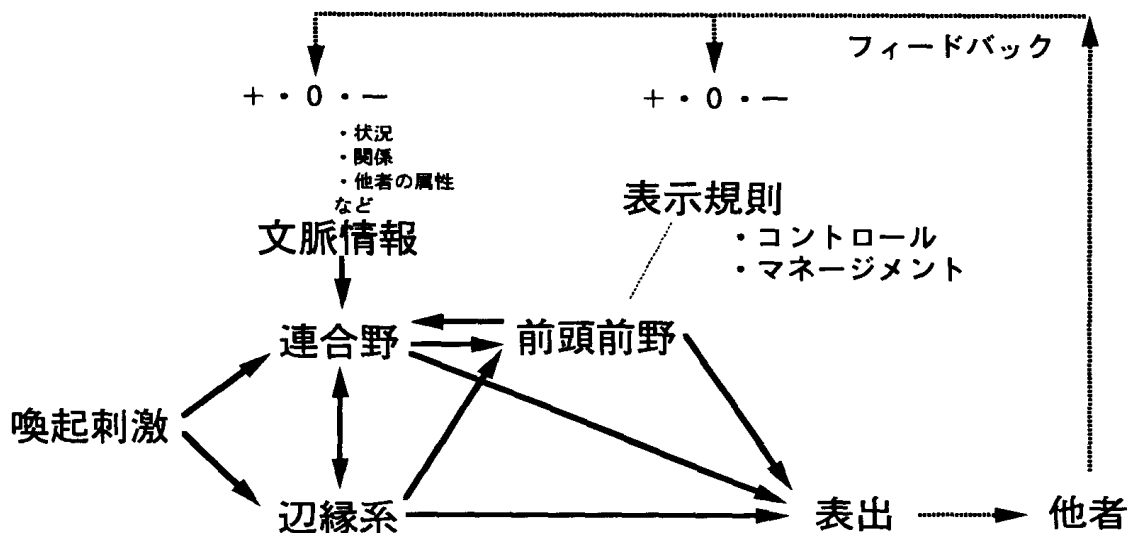


図1 社会的バイオフィードバックモデル

とも示されている。連合野は全体として様々な文脈情報を入手し、特に前頭前野がそれらの情報を踏まえて辺縁系からの感情情報との調整を行っていると考えられる。

先に(3.2節)論じたように、表情などとして外界に示された表出行動は、他者によって評価され、正(+)、または負(-)の評価を下される。ある特定の文脈(もしくは特定の要因の組み合わせ)のもとである特定の表出行動が、正、または負のフィードバックを繰り返し受けることで、その文脈と表情とが結びつき、表出の規則が固定化し獲得されると考えられる。この時、特に年少の子供の場合、養育者の励ましや笑顔が正のフィードバックとなり、同じく叱責や怒りの表情などが負のフィードバックになることが知られている(e.g., Boccia & Campos, 1986; Klinnert, 1984; Zaratany & Lamb, 1985)。表情はルールによって制御される対象であるとともに、ルールを固定化するメディアとしての役割を果たしている。ルールの獲得についての理解を深めるには、このような社会的エージェントとしての他者からのフィードバックのプロセスについての研究が不可欠である。

7. 文化差とその背景としての普遍的メカニズム—結びにかえて

感情と一言で表される現象には、先行事象、感情喚起刺激、環境・状況、関与者、生理的反応、表出行動、主観的経験、表出の制御、感情表出の結果など多様な要因が含まれる。これらの要因は、対人コミュニケーションを規定する諸要因の一部でもあり、その組み合わせやそれぞれの要因がとりうる値が文化差などの背景にある。このように考えると、5.2節で紹介した調査の結果から得られた文化差の背景には、感情とそれを喚起する刺激事態との関連における差異や、感情表出とそれがもたらす結果との関連における差異が集団間に存在する可能性を指摘するものであり、さらに、そのような差異が個人主義対集団主義などの文化を記述する次元へと抽象化され、集団間の差を反映したものとして説明されることを示している。このような抽象を重ねることで、文化の独自性やバリエーションを一定の規則(次元)のもとに記述することが可能になる。

しかし同時に、このような抽象化は、常に、単なる要因の組み合わせゲームに陥る危険性を伴う。複数のサンプルを対象に調査を実施すれば、どんな調査であれ必ず何らかの差異は見出される。そのようにして得られた個々の差異についてその背景要因の組み合わせを考えるとすると、それはあたかも認知科学においてフレーム問題 (cf., 松原, 1990; 中島, 1995) として例示されるような、無限の組み合わせを検討する一種の論理ゲームになってしまう³⁾。しかも、例えば個人・集団主義のような集団を記述する文化的次元は、数十年という短いタイムスパンで変化してしまう可能性のある不安定な性質でもある。

従って、対人コミュニケーションを規定する要因について記述する抽象的次元とその背景にあるルールについて考える時、これらを規定する要因が社会・生物学的環境という制約の中でどんな意味をもつのかについて検討することを忘れてはならない。このような視点を持つことで、バリエーションの基盤になるプロセスを(理論的に)固定させることができ、それを基礎にして生じる文化などの集団差を検討することがより大きな意味を持つ。当然のことではあるが、対人コミュニケーションを構成する様々な要因とその関係に見出される差異を検討し、文化集団間のバリエーションを検討することによってはじめて不変項や普遍性を抽出することも可能になるからである。

注

- 1) 邦訳で用いられたこの文は、厳密には Goleman の原著に引用されているものとは異なる部分の訳である可能性もあるが、本稿の論旨との関係では特別問題にならないのでそのまま引用する。ちなみに Goleman の原著における引用文は、“Anyone can become angry—that is easy. But to be angry with the right person, to the right degree, at the right time, for the right purpose, and in the right way—this is not easy” である。
- 2) 社会生物学の誕生に際しては、人間の行動がすべて生物学的な原理に還元して説明されてしまうのではないかという誤解により、人文社会科学の分野に過度の拒絶反応が見られた。しかし近年になって、心理学や経済学を含む人文社会科学の諸分野にも、進化論的観点を踏まえた説明が試みられるようになり、進化論的観点と諸分野の融合が人間に対する理解を深める上で有効であること

対人コミュニケーションにおける文化差と普遍性

が認識され始めている(長谷川, 1997)。

- 3) フレーム問題は、もともと人工知能における問題解決の領域で生じたものである。定義は研究者の立場によって異なるが、本稿との関係では次のように記述することができる。フレーム問題とは、命題の集合として理解できる知識が新しい情報の獲得に伴って組み換えられるときに、膨大な量の計算が必要になり、場合によってはその計算が永久に終わらない可能性があること、または、そのようなことが起こらないようにどうすればよいかを考える問題である。

参考文献

- Bandura, A. (1986). Social cognitive theory and social referencing. In S. Feinman (Ed.), *Social referencing and social construction of reality*. New York: Plenum.
- Bandura, A. (1971). *Social learning theory*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Bretherton, I. (1984). Social referencing and the interfacing of minds: A commentary on the views of Feinman and Campos. *Merrill-Palmer Quarterly*, 30, 419-427.
- Boccia, M. L., & Campos, J. J. (1986). *Maternal emotional signals, social referencing, and infants' reactions to stranger*. Manuscript submitted for publication.
- Bowlby, J. (1979). *The making and breaking of affectional bonds*. Tavistock Publications.
- Buck, R. (1988). *Human motivation and emotion, 2nd ed.* New York: Wiley.
- 千葉浩彦 「むかう感情・ゆるる感情」(佐伯 胖・佐々木正人『アクティブ・マインド』東京大学出版会、1990年)
- Darwin, C. (1872). *The expression of the emotions in man and animals*. London: New York: Philosophical Library Edition, 1955.
- Dimberg, U. (1982). Facial reaction to facial expressions. *Psychophysiology*, 19, 643-647.
- Eibl-Eibesfeldt, I. (1973). The expressive behavior of the deaf-and-blind-born. In M. von Cranach & I. Vine (Eds.), *Social communication and movement*, 163-194. London: Academic Press.
- Ekman, P. (1994). Strong evidence for universals in facial expressions: A reply to Russell's mistaken critique. *Psychological Bulletin*, 115 (2), 268-287.
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1969). The repertoire of nonverbal behavior: Categories, origins, usage, and coding. *Semiotica*, 1, 49-98.
- Ekman, P., Friesen, W. V., O'Sullivan, M., Chan, A., Diacoyanni-Tarlatzis, I.,

- Heider, K., Krause, R., Le Compte, W. A., Pitcairn, T., Ricci-Bitti, P. E., Schemer, K., Tomita, M., & Tzavaras, A. (1987). Universals and cultural differences in the judgments of facial expressions of emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 4, 712-717.
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1975). *Unmasking the face*. Prentice-Hall.
- Field, T. M., Woodson, R., Greenberg, R., & Cohen, D. (1982). Discrimination and imitation of facial expression by neonates, *Science*, 218: 179.
- Frank, R. H. (1988). *Passions with reason*. Norton. (山岸俊男監訳『オデッセウスの鎖』サイエンス社、1995年)
- Goleman, D. (1995). *Emotional intelligence*. Bantam Books. (土屋京子訳『EQ こころの知能指数』講談社、1996年)
- Haidt, J., Rozin, P., McCauley, R., & Imada, S. (in press). Body, psyche, and culture: The relationship between disgust and morality. In G. Misra (Ed.), *The cultural construction of social cognition*.
- 長谷川寿一 「心の進化: 人間性のダーウィンの理解」『科学』67 (1997年)、248-256頁
- 堀 哲郎 『脳と情動——感情のメカニズム』(共立出版、1991年)
- Hsee, C. K., Hatfield, E., Carlson, J. G., & Chemtob, C. (1990). The effect of power on susceptibility to emotional contagion. *Cognition and Emotion*, 4, 327-340.
- Imada, S., Yamada, Y., & Haidt, J. (1993). The differences of Ken'o (disgust) experiences for Japanese and American students. *Studies in The Humanities and Sciences, Vol. XXXIV, No. 1*, Hiroshima Shudo University.
- Izard, C. E. (1971). *The face of emotion*. New York: Appleton.
- Izard, C. E. (1994). Innate and universal facial expressions: Evidence from developmental and cross-cultural research. *Psychological Bulletin*, Vol. 115, No. 2, 288-299.
- James, W. (1890/1984). Emotions. In *Psychology: Briefer course*. Cambridge: Harvard University Press.
- 柏木恵子、北山 忍、東 洋 『文化心理学——理論と実証』(東京大学出版会、1997年)
- Klennert, M. D. (1984). The regulation of infant behavior by maternal facial expression. *Infant Behavior and Development*, 7, 447-465.
- 小嶋秀夫、大日向雅美編 『母性 こころの科学』No. 30 (日本評論社、1990年)
- Larsen, R. J., Kasimatis, M., & Frey, K. (1992). Facilitating the furrowed brow: An unobtrusive test of the facial feedback hypothesis applied to unpleasant affect. *Cognition and Emotion*, 6, 321-338.

対人コミュニケーションにおける文化差と普遍性

- Levenson, R. W., Ekman, P., & Friesen, W. V. (1990). Voluntary facial action generates emotion-specific autonomic nervous system activity. *Psychophysiology*, 27, 363-384.
- Manstead, A.S.R. (1988). The role of facial movement in emotion. In H. L. Wagner (Ed.), *Social psychophysiology and emotion: Theory and clinical applications*. New York: Wiley.
- 松原 仁 「一般化フレーム問題の提唱」(J. マッカーシー、P. J. ヘイズ、松原 仁 著 『人工知能になぜ哲学が必要か フレーム問題の発端と展開』 哲学書房、1990年)、175-245 頁
- McHugo, G. J., Lanzetta, J. T., Sullivan, D. G., Masters, R. D., & Englis, B. G. (1985). Emotional reactions to a political leader's expressive display. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 1513-1529.
- Melzoff, A. N., & Moore, M. K. (1977). Imitation of facial and manual gestures by human neonates. *Science*, 198, 75-78.
- 中島秀之 「情報科学の方法」(伊藤正男、安西祐一郎、川人光男、市川伸一、中島秀之、橋田浩一 『岩波講座認知科学 1 認知科学の基礎』 岩波書店、1995年)、171-201 頁
- 中村 真 「日本人学生の表示・解読規則・嫌悪と悲しみの比較文化的考察」『宇都宮大学教養部研究報告 28』(1994年)、12-34 頁
- 中村 真 「笑いの心的効果」(『イマージョ 3月号』 青土社、1995年)、30-44 頁
- 中村 真 「表情の文化差と規則性」(『月刊言語』 Vol. 27, No. 12, 大修館書店、1998年)、28-34 頁
- 岡部朗一 「文化とコミュニケーション」(古田 暁監修 『異文化コミュニケーション』 有斐閣、1987年)、39-59 頁
- Provine, R. R. (1990). Contagious laughter: Laughter is a sufficient stimulus for laughs and smiles. *Bulletin of the Psychonomic Society*, 30, 1-4.
- Rozin, P., Haidt, J., & McCauley, C. (1993). Disgust. In M. Lewis, & J. Haviland (Eds.), *Handbook of emotions*. (pp. 575-594). New York: Guilford Publications.
- Russell, J. A. (1994). Is there universal recognition of emotion from facial expression? A review of the cross-cultural studies. *Psychological Bulletin*, Vol. 115, No. 1, 102-141.
- Steiner, J. E. (1979). Human facial expressions in response to taste and smell stimulation. *Advances in Child Development and Behavior*, 13, 257-295.
- Strack, F., Martin, L. L., & Stepper, S. (1988). Inhibiting and facilitating conditions of facial expressions: A non-obtrusive test of the facial feedback hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 768-777.

戸田正直 『感情』(東京大学出版会、1992年)

Tomkins, S. (1962). *Affect, imagery, and consciousness: The Positive affects*, Vol. 1. New York: Springer.

Tomkins, S. (1963). *Affect, imagery, and consciousness: The Negative affects*, Vol. 2. New York: Springer.

Tomkins, S. (1982). Affect theory. In P. Ekman, (Ed.), *Emotion in the human face*. New York: Cambridge University Press.

Vaughan, K. B., & Lanzetta, J. T. (1980). Vicarious instigation and conditioning of facial expressive and autonomic responses to a model's expressive display of pain. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 909-923.

Wallbott, H. G. (1991). Recognition of emotion from facial expression via imitation? Some indirect evidence for an old theory. *British Journal of Social Psychology*, 30, 207-219.

Zajonc, R. B., Murphy, S. T., & McIntosh, D. N. (1993). Brain temperature and subjective emotional experience. In M. Lewis & J. M. Haviland (Eds.), *Handbook of emotions*, (pp. 209-220). New York: Guilford Press.

Zarbatany, L., & Lamb, M. E. (1985). Social referencing as a function of information source: Mothers vs. strangers. *Infant Behavior and Development*, 8, 25-33.